国際交流基金設立30周年・関西国際センター開設5周年
記念シンポジウム

「日本語と日本研究 ～日本を知るための日本語とは～」報告

関西国際センター総務課

1．はじめに

国際交流基金関西国際センターは、日本語国際センター（さいたま市）に続く、国際交流基金では2番目の日本語教育施設として、平成9年に関西国際空港の対岸に開設されました。関西国際センターでは、諸外国の外交官や対日関係を担当する公務員、日本研究者や大学院生（人文・社会科学分野に限定）、図書館司書等を対象に、各人の職務や専門性を背景とした「専門日本語研修」、日本語の学習継続を奨励する目的で実施している「日本語学習奨励研修」、並びに「日本語能力試験」に関する業務を実施しています。

昨年、平成14年（2002年）は、国際交流基金設立30周年、関西国際センター開設5周年という記念の年でした。当センターではこの節目の年に「日本語と日本研究～日本を知るための日本語とは～」と題したシンポジウムを、11月1日（金）に開催いたしました。

今回のシンポジウムは、関西国際センターで実施している、「研究者日本語研修」「大学院生日本語研修」に焦点を絞りました。パネリストとして、現在日本研究の第一線で活躍しておられる方々に、自身の日本語学習経験や現在の研究活動と日本語との関係などについて報告していただき、将来の日本研究者に対する日本語教育の在り方について議論していただきました。

当日は、小雨の降る悪天候の中、会場の定員を越える130名余りのお客様が足を運んで下さいました。ここに当日交わされました、議論の概要をご報告いたします。

2．基調講演

シンポジウムの冒頭、日本研究者（民族学）と

して高名なボン大学日本文化研究所所長のヨーゼフ・クライナー教授に基調講演を行っていただきました。クライナー教授は、1961〜63年に文部省留学生として滞日し、64年に奄美・沖縄の研究で、ウィーン大学より博士号を取得されました。その後、ウィーン大学教授を経て、1977年から現在に至るまでボン大学日本文化研究所所長を務められながら、ヨーロッパ日本研究協会会長やドイツ－日本研究所（東京）初代所長などを歴任され、現在もご活躍中です。1987年にはその功績を称え、国際交流基金より「国際交流奨励賞」が贈られました。

講演は、先生の豊富な経験と知識を物語るように、国際交流基金の設立を契機としたヨーロッパ日本研究協会の創設、ヨーロッパにおける日本学の変遷、日本語の「手段としての受容（Instrumental Reception）」と「完結的受容（Consummately Reception）」といった話題に始まり、小澤征爾氏（指揮者）、住谷一彦氏（社会思想史）などクライナー教授の学生時代にウィーンへ留学していた日本人留学生との交友、日本留学時のフィールドワークを通した日本語学習、現在のボン大学における日本語教育など、ユーモアを交えつつ多岐に渡る話を大変興味深く聞かせていただきました。

残念なことに、紙面の都合でここではその内容をご紹介できませんが、全文を関西国際センターのホームページ（http://www.jpf.go.jp/j/kansai/index.html）に掲載いたしますので、是非そちらをご覧下さい。

ヨーゼフ・クライナー教授

3．報告とパネルディスカッション

クライナー教授の基調講演の後、４名の日本研究者の方々に、日本語の勉強を始められた当時のその国における日本語教育事情や専門分野の知識と語学力との関係、一次資料を取扱える日本語能力の重要性といった事に関し報告をしていただき、その報告を元に最後にパネルディスカッションをしていただきました。それぞれの専門分野は、美学、演劇、経済、政治と広範に渡りましたが、研究に使う日本語とその習得にまつわる問題について、客席からの質問も交えながら、非常に興味深い話を聞くことができました。

今回のシンポジウムを通して、一つ浮かび上がってきたのが、高等教育レベルにおける日本語教師がカバーすべき知識に関する問題です。学生の日本語学習に対する動機づけを高めるために、教師は「学生の専門分野に関する、入門書レベルの知識を身に付けておく必要がある」という意見と、「日本語教師が一人ですべてを抱え込むことは現実的ではなく、人的ネットワークを活用し、学生と専門家をつなぐ道を用意するなどの対処方法を考えるべきである」という意見が出されました。マクドゥガル教授からは、スタンフォード日本センターの日本語上級クラスにおける取り組みとして、「日本語教育と専門分野の基礎教育の両方が出来る人を非常勤講師として招いており、学生から好評を博している。しかし、そういう人を探し出すのは非常に難しい」との報告がありました。また、「日本語学習の一環として、専門分野の基礎知識を得るために適切な本のデータベースを国際交流基金が作成してはどうか」との提案もあり

ました。（因みに、関西国際センターの「研究者日本語研修」では、昨年より関西地区の大学の先生等に「研究アドバイザー」を委嘱し、研修生が自分の研究を進めていくための支援体制作りを始めました。）

専門教育を始めるのは、母語と目的語のどちらがよいか、という論点については、言語によって大きく状況が異なるという指摘がありました。英語・フランス語・日本語などは、出版事情・専門用語の訳語においても様々な研究分野の最先端の情報がカバーされているが、話者の少ない言語を母語とする人にとっては、比較的初期の専門教育から目的語（日本研究の場合日本語）で行わざるを得ない、というものです。また、「日本に留学している学部レベルの学生を見ていると、一般的に、大学という制度に慣れないまま日本語の習得で苦しんでしまい専門を深めることが難しい状況に陥っている、専門教育をある程度受けた後に留学する方が語学の上達が早いのではないか」という意見もありました。

今回のようなシンポジウムでよく話題となる「日本特殊論」については、パネリストから「従来の『日本特殊論』は神話に過ぎない」「従来、安易にこれを唱える研究者が多かったが、正当な反論を行う研究者が少なかった」「一次資料に基づいて書かれた論文が少なく、研究者は日本語を十分に習得した上で自ら調査・研究を行い、この神話を覆していかなければならない」といった意見が出されました。

シンポジウムの終盤、会場から「日本語を教える際、日本の文化・社会について、どのようなことを教えておいた方が良いと思われますか？」という質問がありましたが、二名のパネリストから「日本は、非常に多元的で多様な文化を持っているということを教えて欲しい」といった回答がなされました。

4．最後に

国際交流基金日本語国際センターの「日本語教育機関調査（1998年）」によると、日本語学習機関を教育段階別に「初等・中等教育機関（小学校～高等学校）」「高等教育機関（高等専門学校・短大～大学院）」「学校教育以外の機関（語学学校等）」に分けた場合、学習者数が最も多いのは初等・中等教育機関で、全体の約65％を占めています。しかし、前回調査（1993年）からの学習者数の伸び率を見ると、高等教育機関が最も大きく39.1％（約46万人）と報告されています。

今回のシンポジウムでは、「日本特殊論」についての議論もあり、そこでは日本研究者の責任が問われるという場面がありました。各国で日本理解を深めてもらうためには、研究者の「層の厚み」は欠かすことの出来ない要素であり、また、日本語学習者、日本に関心を持つ人々の裾野を広げる意味でも、日本研究者の果たす役割は非常に大きなものがあると言えます。その意味で、今回のシンポジウムは、日本研究者を目指す方々への日本語教育の重要性と難しさについて、再認識させるものとなりました。

最後になりましたが、基調講演をお願いしたクライナー先生、司会を務めていただいた大坪先生、他五名の出席者の皆様、そして最後までお付き合い下さった聴衆の皆様に心から感謝申し上げます。

期日	2002年（平成14年）11月１日（金）　10：30〜17：00	
場所	国際交流基金関西国際センター　ホール	
プログラム	出席者氏名（敬称略）	所属（専門）
基調講演	**ヨーゼフ・クライナー** Josef Kreiner	ボン大学日本学研究所所長・教授（民族学・文化人類学）
	1940年オーストリアに生まれる。1964年ウィーン大学で博士号を取得。ウィーン大学日本学研究所所長（1971－76年）、ドイツ－日本研究所（東京）所長（1988－96年）を歴任。現在はボン大学日本文化研究所所長・教授を務める。村レベルの宗教と社会、第二次大戦後の近代化過程における価値観の変遷など、広く日本社会、日本文化の諸問題を対象にさまざまな研究に取り組み、数多くの業績をあげている。	
報告と討論 ※大坪氏は司会。金専門員はコメント及び討論のみ参加。	**ジャクリーヌ・ベルント** Jaqueline Berndt	横浜国立大学助教授（芸術学・視覚文化論）
	1963年ドイツに生まれる。フンボルト大学で美学博士号を取得。1994年から2001年まで立命館大学の助教授を務める。現在は横浜国立大学教育人間科学部助教授。メディアと芸術、サブカルチャー論、美術館論等の授業を担当する。	
	ジョナ・サルズ Jonah Salz	龍谷大学助教授（比較演劇論）
	1956年アメリカ合衆国に生まれる。1987年ニューヨーク大学で博士号（パフォーマンス研究）を取得。現在は龍谷大学国際文化学部教授。1981年に大蔵流狂言師茂山あきら氏とともに、能・狂言の決まりごとを使って西洋演劇を表現する能法劇団を設立した。関心は、狂言、ベケット、インターカルチャー演劇など。	
	マノジュ・L. シュレスタ Manoj L. Shresta	甲南大学教授（経済戦略論・技術移転論）
	1959年ネパールに生まれる。1988年京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。その後、大阪府産業開発研究所、国際日本文化研究センターの来訪研究員を経て、2000年より甲南大学経営学部で教授を務める。これまでアジアにおける日系企業の技術移転戦略、日系企業の知的財産マネジメントの比較などをテーマに研究発表、論文の執筆を行っている。	
	テリー・E. マクドゥガル Terry E. MacDougall	スタンフォード日本センター所長・教授（政治学）
	1941年アメリカ合衆国に生まれる。1975年イエール大学で政治学博士号を取得。その後、ヴァージニア大学、ハーバード大学、ボストン大学で准教授を務める。知日派の育成と日米の学術交流を目的として京都に設立された、スタンフォード大学の海外キャンパスのひとつであるスタンフォード日本センター所長に1992年に就任、翌年からはスタンフォード大学の教授も務める。	
	金　秀芝 Kim Sooji	関西国際センター日本語教育専門員（日本語教育）
	1964年韓国に生まれる。1987年誠信女子大学校日語・日文学科卒業。1990年名古屋大学文学研究科日本言語文化専攻博士前期課程修了。1997年には大阪大学文学研究科日本学専攻後期博士課程を単位取得退学。同年より国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員に就任、現在に至る。これまで研究者日本語研修、大学院生日本語研修及び司書日本語研修を担当している。	
	大坪一夫 Otsubo Kazuo	麗澤大学外国語学部教授（日本語教育）
	1936年福島県生まれ。1964年東京教育大学大学院文学研究科修士課程（言語学専攻）修了。筑波大学文芸・言語系教授、東北大学文学部教授（日本語教育講座）を歴任。現在は麗澤大学外国語学部日本語学科教授として日本語教育入門、日本語教育上級演習等の講座を担当している。日本語能力試験教材や日本語学習に関する著書・論文多数。	